

令和6年度特別企画

# 山鼻未来講座

—ヤマハナを知る—

講 演 録

日 時：2025年1月25日（土）午前10時30分開会  
場 所：中央図書館 3階 講堂

## 1. 開 会

○司会 おはようございます。定刻になりましたので、始めさせていただきます。

皆様、本日は、お忙しいところ、山鼻未来講座にご参加をいただき、誠にありがとうございます。

私は、本日の進行役を務めさせていただきます山鼻未来・ネットワーク協議会幹事長の小堤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の講座を始めるに当たり、皆様にお願いがございます。

講座は1時間半程度を想定しております。お手元の携帯電話、スマートフォン等につきましては、電源をオフまたはマナーモードにさせていただきますよう、よろしくお願いいたします。

また、大変申し訳ありませんが、山鼻未来・ネットワーク協議会の広報誌への掲載などに使用するため、講座の開催風景写真を、ご参加の方々のお顔が写らないよう、会場の後ろから撮らせていただきたいと思いますので、ご了承くださいませようお願い申し上げます。

## 2. 挨拶

○司会 初めに、山鼻未来・ネットワーク協議会の阿部会長よりご挨拶を申し上げます。

○阿部会長 おはようございます。

ただいまご紹介賜りました山鼻未来・ネットワーク協議会の阿部でございます。よろしくお願いいたします。

週末の貴重な土曜日の午前中ということで、皆様方に大変ご迷惑をかけるのではないかなと思って、多少の危惧もありましたけれども、ご覧のように、定員いっぱいのご来場をいただきました。本当にありがとうございました。

特に、今回は、大変失礼なことではあるのですが、非常に希望者が多かったということで、マックスで100名という制限を設けさせていただきましたが、あっという間に、八百屋さんで言うと、あっという間にキャベツが売り切れてしまいました。キャベツという例え話をするのは大変失礼なのでありますが、キャベツは今高うございます。ということで、本当に、早々、応募していただきました。本当にありがとうございました。

山鼻未来・ネットワーク協議会は、ご存じの方はもちろんいらっしゃると思いますが、歴史的にはかなり古くございまして、今から19年ぐらい前に創立をさせていただきました。当時、札幌市では、各地区のいわゆるセンター構想、地区センター構想というのがございまして、例えば、中央区で言うと、中央区民センター、それから、もう一つ、中央区には地区センターがありますが、旭山公園通地区センターは地区センターと申し上げていますが、この構想がありまして、文教地帯と言われているこの山鼻地区にも地区センターを何とかつくっていただきたい、そういうことからスタートした組織でございます。

しかし、ちょうどその前後、1年後に、当時の市長の方針もございまして、地区センタ

一構想が中止ということになって、現在、その後、一か所の新築もございません。

そういう経緯の中で、ネットワークとしては、これは皆様方もご存じだと思いますが、最後に中央区の区民祭りとまで言われるようになった市電フェスティバルという大きな行事がございました。中央区、交通局、ネットワーク合同共催ということで、十五、六年続いたのでありますが、諸般の事情で中央区とネットワークがご辞退を申し上げて、その後、中止という状況になっております。

その後、ネットワークとしてどういう構想で臨もうかということのをいろいろ考えまして、現在のように、この山鼻未来・ネットワーク、山鼻未来講座という、ちょっと生意気な表現をさせていただきましたが、この講座を設けて、ちょうど今回で4年目ぐらいになると思います。その都度、非常に多くの皆さんにご来場いただいて、本当に感謝しているところであります。

後ほど司会からご紹介があると思いますが、本日の講師の先生は、あちらにいらっしゃいますが、よくよく、しげしげと顔を見るとお分かりだと思いますが、皆さん方は映像の中で何度か見ていらっしゃると思います。札幌市の歴史その他について、非常に造詣の深い先生でいらっしゃいますので、いろいろなところで、特に、私の記憶ではNHK中心かなと思いますが、テレビの世界でなじみのお顔でいらっしゃいます。

あえて申し上げますと、一番近いテレビは大泉洋さんの「ファミリーヒストリー」でしょうか。これはNHKですよ。これにご出演なさっていらっしゃる先生でございますので、そういう意味でも、非常に市民にもなじみが深い方でございます。

後ほど詳しいご紹介もあると思いますが、大変お忙しいところをたつてのお願いを受けていただきました。本当にありがとうございました。

そして、今年から、我々山鼻未来・ネットワークと併せて、中央図書館との共催という形を取らせていただきました。こういう札幌市の財産を使うということもありますので、広く皆さん方ということで、対象は札幌市全域でございます。それで、相当数のニーズが見込まれたので、やむを得ず、制限させていただいたということでございますので、ご了承をいただきたいと思います。

それでは、短い時間ではありますけれども、ひとつよろしくお願いを申し上げます。

今日は、お忙しいところをご来場いただきまして、本当にありがとうございました。(拍手)

### 3. 講師紹介

○司会 それでは、これより講話いただく講師をご紹介いたします。

講師は、元札幌市公文書館職員の榎本洋介さんです。

簡単ではございますが、私から榎本さんについてご紹介させていただきます。

榎本さんは、1955年、北海道のお生まれです。

1982年に札幌市史編集調査員として採用され、1989年、新札幌市史編集員とな

り、札幌市の歴史の編さん作業に携わられました。その後、札幌市に公文書館が設置されますと、その職員として、公文書の保存や調査研究、札幌の歴史に関する情報発信などをご担当されました。

主な著書に「北海道の歴史と文化」「島義勇」などがあり、現在も札幌の歴史や開拓史をテーマに、精力的に調査研究や講演活動などを続けておられます。

それでは、講話をお願いしたいと思います。

テーマは、次第にありますとおり、「札幌の歴史と山鼻村」です。

榎本様、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 4. 講 話

##### 「札幌の歴史と山鼻村」

○榎本講師 どうも、こんにちは。榎本です。

ご紹介にあずかりましたとおり、歴史のほうで頑張っております。でも、最近、友達からメールが来ると、テレビ俳優の榎本君というふうな格好で来ます。たまたま、最近、NHKに出させてもらったのです。でも、大泉洋のときも、それから、その前に山鼻の1000番地ということが出たのですが、撮影は2日間ぐらいかけて、私は、多分2時間とか3時間、映ったのですけれども、テレビに出たのはほんの数秒ですね。ああ、あれだけ頑張ったのにと思ったのですが、大泉さんなり1000番地の話が主流ですので、私の顔が出て仕方がないのでね。

大泉洋さんを特別調べているわけではないのですけれども、でも、調べていたらいろいろな面白いことが分かりました。その分かったことの一部は、実は11月に中央図書館でやった講演の内容です。大泉洋を調べたわけではないのですけれども、大泉洋に関連する資料群をずっと調べていたら、土地払下げのことでいろいろな資料が出てきました。

テレビには出ませんでした。大泉洋さんのひいひいじいちゃんに当たる方が白石に入籍して開墾を始めるのですが、1年間で奥行き40間ぐらいしか開墾していないというか、できなかったのです。ひいひいじいちゃんが25歳かな、その奥さんが19歳です。大泉さんのうちは2人で開墾されたのです。ところが、40間幅のうち、東側のほうは数間、開墾していないのですよ。何でかなと思って見ていたのですけれども、そうしたら、その後、警察官をやった後に、もう一度、土地の払下げを受けるのです。40間しか開墾できなかった奥のほうを、さらにもう一度、払下げを受けて開墾を始めるのですけれども、そのときの絵図面を見ると、大泉さんがもらったところの東脇には川があるのです。川があるので、開墾ができていなかった。ですから、40間の幅をもらったのだけれども、実質は30間程度しか開墾できなかったのです。

多分、真冬にももらったからなのですよ。明治4年11月ぐらいから準備して、12月末ぐらいに入植してくるのですよ。その当時の札幌の主任官の岩村さんという判官が、春になってから入植しなさいと言ったのですけれども、佐藤孝郷たち、白石の指導者たちは、

いや、頑張っって入植すると言っって、真冬の雪がたっくさん降っっている最中に入植したのですね。恐らく、そのときに割り当てられて、雪が解けてみたら川だったということだったのかなということが想像されます。

1 1月から1 2月というっ、ほぼ今ですよね。1 2月半ばぐらいいから今ぐらいいまでの時期ですから、今年は、たまたま天気が味方してくれて、雪が少ないからいいけれども、一番雪の多い時期でしょう。ですから、見誤ったというより、地形を見られなかったのでしょうね。そんなところに入植させられて苦勞して、それも若い2人が開墾を始めるわけですから、進まなかったという、本当はそんな話もしたかったのですが、そこはいいですと全部カットされてしまいましたので、ちよっつと付け加えておきます。

こういう脱線をしていっると、話が前へ進まないし、いっつも時間がなくなっってしまうので、早速、話のほうを進めていこうと思っいます。

あまり山鼻の開拓の話ということにはならないかもしれませんが、山鼻のことをいろいろ調べて、どんな話をしようかというときに、屯田兵の話をするのは一般的になっってしまうかなと思っいたので、なるべく避けて話を進めていこうと思っいます。

いっつもやることですが、既にレジュメと資料をお渡ししてあります。今映っっているのがレジュメです。一応、このレジュメが話の道筋です。

1と4は、概説的な部分です。話の中心は2と3になります。何の話をしようか、いろいろ考えたのですけれども、多分、3の話が一番中心になろうかなと思っておっります。ちよっつと大胆な勝手な仮説も含めてお話をしつっつというふうにおっいます。

このレジュメの右端のほうに①、②、③と載っっていますが、これが資料番号です。レジュメの下の方にいろいろと資料が載っかっっています。ですので、レジュメでこの辺の話をしていっるときは、この資料の番号のところを見るのかと理解していただけると助かります。

では、話をスタートさせます。

皆さん、札幌の歴史は、それなりにご存じだらうと思っいますが、札幌が本格的に開拓され始めるのは幕末ぐらいいからになります。ロシアが北のほうからだんだん進出をしてきて、樺太辺りまではもう来てしまっっているという時期で、蝦夷地を、北海道をどうやって日本の国内として残しておこうかという動きの中で、石狩の開拓が始まります。そのときに、勇払から石狩までの道路をつくっって、その中間点のところは札幌辺りという感じで開拓を始めるといっることになります。

勇払というのはい、今で言うっ、苦小牧の苦小牧新港という掘り込みの大きな港がありますが、その東側です。一応、資料館などはいあるのですが、どちらかというっ、苦小牧の中心部とは全然違っ、寂れると言っると怒られてしまっうかもしれませんが、住宅地も若干ありますけれども、苦小牧の町なかというよりは、田舎のまちみたいな部分のところですね。

そのところから、千歳をっ通っって、札幌をっ通っって、銭函をっ通っって、石狩へ行くという道路をつくっって、それが太平洋側と日本海側の連絡路、それが重要な交通路、今で言うっと国

道に当たるような道路としてつくられるということになります。

それを守るためということではないのでしょうけれども、その近くで開拓の中心になりそうなところだと判断されたのだらうと思いますが、石狩平野の札幌の近くの開拓を始めていきます。

「幕末の入植」とレジュメに書いてあるところに、琴似村、発寒村、星置村、篠路村、札幌村という五つの村が書いてありますけれども、大体、今の地名の辺りです。札幌村だけが、今は地名がなくなって、今の東区に当たりますが、その辺りが開かれたということです。

開拓をした人の中心は、幕府の旗本、御家人の次・三男を中心にした役職に就けないような人たちですね。そういう人たちを在住という身分にして、そして、蝦夷地へ派遣しました。それまで、次・三男だと給料をもらえない立場だったのですが、在住という身分をもらおうと、給料をもらえることになって、その給料でもって農民を雇って開拓をするというような方式だったようです。

ですが、個人の給料では、なかなか開拓というのは少なくて、ちょこちょこ、ちょこちょこという開拓程度だったのですね。それを大規模にやらなくてはということで、慶応の時代ですから最幕末に大友亀太郎みたいな人が札幌へ来て、幕府というか、箱館奉行所から大金をもらって、例えば、大友堀という堀をつくって、いわゆる社会資本を1個、今から見ると簡単な社会資本ですが、生活用水や農業用水のための水路をつくった上で農業開拓を始めるという方式に変えて、開拓を進めていくというふうにします。

その後、幕府が続けば、案外続いたのかもしれませんが、幕府が倒れてしまったので、それで一旦は中断してしまう形になります。

この辺を、開拓の仕方というか、北海道の位置づけ、蝦夷地の位置づけというものの変化ということで捉えると、それまでは、蝦夷地を未開地の状態にしておくというのが幕府の態度だったのですね。例えば、田沼意次や松平定信という人が政権を握っている頃に、その当てもロシアが南下してきていて、蝦夷地は危機感があったのですけれども、そのときは、最終的に未開地のままにしておいて、ロシアが蝦夷地に興味を持たないようにしておくのがいいだろうというような考え方だったようです。

多分、幕末になると、それから60年ぐらいたってくると、それでは収まらなくなってきたという、それだけロシアの南下が切迫してきたということですね。

幕府が倒れて新政府になっても、状況は同じです。むしろ、樺太では、駐留するロシアの軍隊の人数が大分増えてくるので、危機感というのはより増してきているという感じの時代に札幌が再度注目されてくるということです。

そのときに、北海道の開拓を進めるために開拓の本拠地をつくらうという考え方で、その当時、北海道、樺太を開拓するためにつくられた開拓使は国の役所です。都道府県的な地方役所ではなくて、国の役所です。

島義勇という開拓判官ですが、開拓史の長官、次官、判官という順位になりますので、

実はナンバー3です。ただ、次官はいないので、実質、ナンバー2です。さらに言うと、長官というのが北海道へ渡る3週間ぐらい前に就任した東久世さんですので、開拓使ができてから2か月以上、ずっと主流で動いていたのが島義勇だったので、実質はリーダーだったとかという話も残っています。その頃の資料を見ると、当時は、明治2年7月、8月ぐらいのことですが、主宰をしていたのは島判官であるというような公文書も残っているぐらいです。

島判官が札幌に開拓の本拠地をつくるために来て、明治2年11月ぐらいからまちづくりを始めていき、まちをつくって、役所をつくっていきます。この島さん云々は、いろいろな話がありますが、そちらの話をする、当然に今日の話が進まないで全部カットしまして、札幌に人々が移ってくる様子を簡単に見ていこうと思います。

島義勇さんは、別にまちづくりだけではなくて、実は、まち周辺に住む農民も募集します。それがレジュメの中では「庚午移民」と書いてある人です。明治3年が庚午の年なので、移民のほうは今出てきませんので、取りあえず庚午移民ということで進めていきます。

そこに書いてあるとおり、苗穂村、丘珠村、円山村、それから札幌新村という大友亀太郎が開いた札幌村のちょっと北側のところに新しく入れます。四つの村というか、新村と言いまして札幌村と一体になるので村の数が増えるわけではありませんが、そういう村がつくられていきます。

明治3年の秋ぐらいから札幌の近くで移民募集をします。その移民のことを辛未移民と言います。場合によると、辛未一ノ村と言ったりします。その人たちは、明治4年2月になると、琴似の八軒、十二軒、二十四軒に入植します。これらが、明治に入ってからからの移民の最初の人たちということになるかと思っています。

その後、どんな人たちが入ってくるかというのが、そこに3行ほど書いてある人たちです。明治4年ぐらいから平岸や月寒へ入っていきますし、先ほど話に出た大泉さんのひいひいじいちゃんが入ってくる白石、その白石に入る人たちと同じ団体ですが、分かれて手稲に入った人たちがいます。8年になると、琴似に屯田兵、9年になって、山鼻に屯田兵、発寒に屯田兵が入植してきます。この山鼻未来講座の山鼻地区にも入ってくると。でも、山鼻に入るのは屯田兵が初めてではありません。それ以前から、ちょこちょこ入っています。

その後は、クローズアップされた団体はあまり入ってきません。でも、自移民と言われる人たちが入ってきて、既に開かれた村の近くに入植していくというふうになっていきます。

ほかに団体で名前がよく出てくるのは、「その後」の後に書いてある篠路村の興産社の話ですね。これは徳島から来て藍をつくったというので、今、あいの里という名称になっているのですが、それから、当別太と言いまして、今は東区になってしまっていますが、昔は篠路村の東端だった福移です。今だとほとんど人がいなくて、大きな建物で目立つのは篠路のごみ処理場、焼却場がたしかまだありますかね。それ以外はほとんど原野

で、ぽつんぽつんと、多分農家だと思いますが、あって、その中に義務教育学校福移学園というのが残っています。

福移の「い」は、井戸の井ではなくて移るという字です。これは、福岡県から移ってきたので福移、移動、移るというので福移と言います。福井から移ってきたのは、西区の西野に福井野地区があります。そこが有名ですけれども、そちらの福井ではなくて、福岡から来た人たちということです。こんなような人たちが入植をしている。これは、団体で入植している人たちです。ですので、それ以外にもいろいろなところから、単独で、ないしはグループでも個人名で入ってくるような人たちはいます。

先ほど紹介してくれたように、私は開拓史や札幌県の時代の資料をずっと調べているのですけれども、大泉さんの資料を調べていることで、ちょっと興味を持って、団体でなく入植したような人たちの資料をわっと調べていくと、団体でない移住者が結構いるのですね。人数的には、もしかすると、そちらの人たちのほうが多いかもしれないです。でも、何で団体の人たちがクローズアップされるかという、団体だからですよね。団体だからまとめて話しやすいですが、あとは、個人の名前で言うしかないからですね。

そうやって調べていって、いろいろなこと、面白いのが出てきたのは、例えば、庚午の移民の人たちで、やはり失敗する人はいるのですよね。それで、いなくなってしまうのですよ。そうしたら、後から来た人が、その出奔した、いなくなった人たちの土地をもらってそこを開墾するのですよ。そうすると、逃げたとしても若干開いているのですよね。だから、そこを拠点にして、多分、開墾地を広げる。だから、2次的に来た人は楽なのかもしれないですね。広げていくというと、やはり大変なのでしょうね。

あとは、11月に中央図書館でやった講演の中でちらっと話しましたが、琴似屯田や山鼻屯田の人たちも、家族が多かったら、違う土地をもらって開墾していくようなこともしています。

そういう話は、今まで札幌や北海道の歴史ではほとんど話になっていなかったのですが、最近、興味を持ってそちらのほうをずっと調べていくと、結構います。

中には、開拓史の役人たちが、あるところに集中してずっと土地をもらっていたりするのでよね。何だ、こいつらと思ったのですが、多分、地権をもらおうと私有地になるんですね。それで、篠路屯田が入るところを先行的にもらっているのですよね。ただ、時期はもう5年も6年も前なのですが、それなのにそういうところに開拓使の役人たちがたくさんもらっているです。大体1万坪に近いぐらいの単位でもらっていたりしているわけですよ。何だ、これと思ったのですが、ああ、これは土地転がしだな、今で言うと、原野商法なのだろうなと。勝手に私が判断しているだけで、本当に原野商法かどうかは知りませんが。

ですから、そういう入植の資料を調べていくと、えっ、こういうことがあるのかいと、それも開拓史の役人が先行して手に入れて土地転がしそのままではないかと勝手に想像したりしています。勝手な私の想像で、本当に土地転がしかどうかは知りませんよ。



団体移住でなくても、いろいろな人たちが入ってきていますよという話の中でしたが、それがこの地区にはそれなりに関わってくる話でもあるのですが、2のほうへ行きますと、この山鼻地区の話になります。

今のところ、いろいろ勉強してみますと、山鼻地区で一番早いのは、恐らく明治4年ぐらいに山鼻の山沿いのほうに入った人たちです。今で言うと、伏見地区、藻岩山の少し北側の麓の辺りぐらいのところの開拓へ入る人たちが、1番かどうかは分かりませんが、早く入ってきた人たちということになります。

それとほぼ同じ頃に、レジュメでは「東本願寺移民」と書いてありますが、通常は本願寺移民という言い方をします。お寺が本願寺ではなくて東本願寺なので東をつけておきましたが、本願寺移民のことです。この人たちは、正確にはどこへ入植したのかというのが分かっていないみたいですが、恐らく本願寺の周りに入ったのだらうと思います。後になっていろいろ確かめてもなかなか確かめられなくて、本願寺の北側に入植した人たちは確認できるという話にはなっています。

本願寺の北側というと、札幌区の範囲に入ってしまった山鼻とは関係ないような地域になってしまうので、本願寺移民の話が入植した地域というのはあまりはっきりしてこないのかなと思います。

先ほどお話しした琴似に入った十二軒や二十四軒の人たちのことを本願寺移民というようなことを言っているところもあったのですが、それはまるっきり間違いです。本願寺移民は、別個に募集された人たちが十二軒や二十四軒に移った後に札幌周辺に入ってきた人たちです。恐らく、私の予測としては、本願寺の周辺に入植しているのだらうと思うのですが、地図や名簿ではなかなか確認ができなくて、どこそこというふうにはっきりは言えません。北側の札幌区、市街地のほうの端っこに入植したらしいというのは、何となく名簿の中では確認できる、その人たちだけが確認できています。でも、確認できない分は、多分、今の南7条より南側に入ったのだらうと予測はしているのですが、なかなかはっきり確定はできません。それなので、レジュメでは、「寺周囲に入植？ 山鼻辺？」とはなにしてあるのです。お寺の周辺に入ると、北側は南7条になって、札幌区の範囲に入ってしまう。都市部のほうに入ってしまうので、もしかすると、本願寺の募集で入ってきたのですが、管轄的には分かれてしまったのかもしれない。

すっかり忘れていましたが、資料をお見せしていきます。

話は過ぎてしまいましたが、これは島義勇が札幌にまちづくりをした頃の様子で、周辺に、琴似、発寒、篠路という村があったよという話をするときにする予定だったのですが、見せるのを忘れておりました。

明治6年頃の札幌の地図ですが、山鼻の部分だけを大きくすると、こういう地域になります。この地図は皆さんにお渡ししてあるかと思います。

山鼻が大体この辺りになって、この赤い線が道路ですね。円山と平岸も映っていますけれども、多分、赤い点々が入植者の家を指していて、赤い線が道路になっています。東本

願寺がここにあつて、多分、さっきの移民たちは、この周辺に入ったのだろうなと思います。後の戸籍を見ると、この辺の人たちは確認できます。

ですから、当時の山鼻地区というと、ほぼ何もない様子というふうにこの地図では描かれています。多分、この辺に伏見の人たちが入っているはずで、赤い点が家のはずなのですが、この辺に家が入っていません。ですから、確認されていないということはないと思うのですが、この地図には描かれていません。

そういう面で行くと、これは完璧な絵図面ではないので、それを勘案しながら見ていかななくてはならないのですけれども、でも、道路が実際にこれだけの数があったのか、逆に、これだけしかなかったのかというのは分かりません。ただ、明治5年か6年ぐらいに道路がつくられていることになっていますので、どちらかの道路はあったと思います。

見ていただくと、この道路がずっとこちら側まで来て、石切山と書いてあるのですが、今の硬石山のところまで道路が行くことになっています。こんな地図ですね。先ほどのものが明治6年の地図で、これが7年の地図です。ここの部分だけのものは皆さんにもお渡ししています。

明治7年になると、村の範囲が決まってくるので、村ごとに色分けしてある様子が分かるのですが、これの山鼻だけを見ると、こんな感じになります。道路が少し増えてくるから、一応、赤い点が人家のはずなので、赤い点が出てきます。中島公園のちょっと西側のところとか、この辺にもぼつぼつあるらしいのですが、あとはこの辺、それから、この伏見のところにしっかりと赤いドットが描かれて、はっきりと確認されてきていることが分かるようになっていきます。この頃も、道路がずっとちゃんと石切山まであるということになっています。

あとは、山鼻村の範囲がこういう範囲になっています。後の山鼻村はもっとこの辺ぐらゐまで来ていますので、この頃はまだ境界が確定していなかったのかもしれないけれども、これでいくと、ここで9条か10条か11条か、その辺りになるのでしょうか。そこぐらゐまでしか山鼻村の色が塗られていません。これで境界が確定しているのかどうかまでは、ちょっと分からないです。多分、ほとんど人が住んでいないので、境界があってもなくても同じなのかもしれません。

山鼻地区の人が住んでいる様子みたいなものは、こんな感じではないのです。いろいろな資料や様子を見ていると、一応、赤い点が入植者の家ということになっているのですが、それ以外にも多分入っていたのだろうなという感じはします。ですから、地図はあくまでも参考で見ていただいて、先ほどから見ると道路も多くなってきていますから、確認できないだけで、道路沿いにぽつんぽつんと人は入っていたのかもしれない。

先ほどちらっと言いましたが、団体移民だと、こういうようにドットしやすいのでしょうかけれども、ぽつんぽつんと入る自由移民の場合だと、きっと、この当時としては、なかなかドットがしにくかったのかもしれないですね。

それが、明治7年に山鼻村と村に名前がつきます。豊平村と上白石村と一緒に村の名前

がつくので、文章的には一つになっていますが、波線が引いてあるところを拾って読んでいただくと、山鼻のことになります。

序下より、ハツタリヘツ迄石切山道筋左右も、同様というのが耕地払下げですね。払下げにつき山鼻村と名づけたというふうに、このときになって山鼻村の名前をつけます。こちらの場合は、こういう山鼻村という名前をつけますよという伺いです。決定がこちらになります。明治7年9月に山鼻村ができるということです。

山鼻村はここですね。

「山鼻村。右ハ石切道左右へ移住ノ分」というので、石切道というのが何なのかという話ですが、恐らく、さっきの地図でいくと、これだと思います。石切山へ行く道路です。ですから、こちら辺へ行くと、どれなのか分かりませんが、もしかすると、この全部を指しているのかもしれませんが、これらの道路の左右に入っている人たち、左右というのも本当に左右なのか、ここの人たちのことを左右と言うかどうかというと、厳密にいくと、いろいろ難癖をつけたくなるので、あまり厳密に考えないで、大ざっぱに、この辺の道路の左右、ちょっと離れていても、この辺に住んでいる人たちぐらいに考えていただければいいかなと思います。

はみ出していますが、これが多分初めて出た山鼻村の簡単な歴史、沿革を書いたものです。

これの下に書いていますけれども、「移民履歴調」という資料の中にある山鼻村の移民の履歴です。簡単な歴史です。たしか明治10年頃に書かれたものだと思いますが、数年たった段階で書かれたものです。

「山鼻村ハ明治七年寄留ノ農民五六名ニテ開拓」と書いていますが、明治7年にいきなりではないと思うので、この辺は、明治7年の段階で確認したら、移民がこれぐらいいたということだろうと私は理解しています。その後、明治8年に入って、9年になったら屯田兵が入ってきてということが書いてあります。

この山鼻で知っておくといいいのは、この辺りですかね。「中央屯田兵耕地ハ礫确ニシテ」とあります。これはどういうことかということ、石がひどいということです。元河川敷ですので、今の豊平川、札幌川の扇状地ですので、僕は地質のほうは詳しく分らないですが、もしかすると、扇状地として若いのもかもしれないですね。だから、これは勝手な想像ですが、まだ表面が腐植土で覆われていない、そういう意味なのかもしれません。

さっきの地図で見ると、最初に、中心部よりは中島公園寄りと伏見寄りに赤い点々がありましたよね。という、その辺は勝手な想像ですけども、中央部の礫确の石が多いところは避けたというふうに言えるのかもしれませんが。ですから、むしろ屯田兵の入植したところの跡という形になるみたいですので、屯田兵は、むしろ悪いところに入ってきたという解釈になるのかもしれませんが。

ここで、札幌の地域の村々の様子をちょっと見ておきます。

これも上下が切れてしまっていますが、集落として札幌は17の村があったと言

われています。これは明治13年ですが、13年には16の村です。明治15年になって山口村ができるので、それで17の村ができると言われていました。

その後、明治30年代になって、今の自治体に近い自治体として村ができていくのですが、それまでの村は、行政的な村というよりは、どちらかというと、今でいう町内会に近いような村だと思っていただければいいかなと思います。ただ、それでも議会みたいなものがあったりしてはいますが、権限的にはそちらだろうということです。

管理者は、むしろ上の役所、開拓使だったり、札幌県だったりするのですが、その後、明治30年代になって、北海道一級町村制や二級町村制というものが施行されて、制限はあっても自治体というふうになります。

自治体になるときに、幾つかの村ごとに区域を決めて自治体になっていくというふうに表がつくってあります。この表は、それぞれの人口を示しています。本籍人口と現住人口というのは、本籍だけの人数と現在住居している人口のことを指しているようです。ですから、今の住民登録人口と本籍人口との差というイメージで考えていただくといいかなと思います。今の自治体に近い自治体になるときに、幾つかの村ごとに人口が表されているというふうにご理解ください。

注目していただきたいのは、下2段の段です。合計と書いてあるのと札幌区と書いてありますが、札幌区という部分はまち中の中心部のことです。それに対して、合計というのは周辺の村全部です。山鼻村も含めた全部です。

一番注目していただきたいのは、この辺ぐらいからですね。明治15年、20年、30年、40年の人口が書いてあります。今から見ると小さな数字ですが、急増しているのが分かりますか。例えば、ここでいくと10年間で1万人弱ぐらい、明治20年から30年だと倍増、札幌区でも1万3,000人が3万5,000人、6万6,000人というふうに急増しているということです。

これは、北海道への移住者が増えたことによりますが、札幌の人口の拡大というのは、このときからつい最近までずっと続くのです。大体、平成の初めぐらいまで急増です。150万人ぐらいまではずっと急増という形で急増していたのは、皆さんも何となくご存じだろうと思います。ここ20年ぐらいは、伸び率は大分鈍化していますが、少しずつ伸びていたのですが、この四、五年で、やっとな減り始めてきています。この頃から増え始めていったのが、つい最近までずっと続いていたということです。

ただ、明治期、大正期ぐらいまでは、周辺の開拓地の人たちが入ってきた。その前後ぐらいから、今度は開拓地の役割が終わって、札幌が北海道の中心都市だという位置づけになってきたので、増えてきているのかなという感じかもしれません。

これは、札幌の概観です。札幌がこれだけ大きくなっている中での山鼻の位置づけを見に行きますと、実は、山鼻屯田が入ると、かなりの部分が山鼻屯田の区域に入ってしまうのですよね。山鼻の歴史や琴似の歴史というと、大体、屯田兵の歴史が主流になってしまうことが多いのですが、そちらは、私の好みで外させてもらって、ちょっと違う方面の話

をします。

これは、実は、明治2年、札幌の開拓が始まる前の札幌の中心部の絵図です。先ほど見たように、琴似、発寒、篠路は、こちらのずっと遠くのほうです。これは、今のまちのほぼ真ん中です。これが今の豊平川です。当時、札幌川と言われていました。この真ん中にあるのが今の創成川です。当時は、新川とか新堀と言われておりました。

これを拡大してもよく見えないのですが、多分、皆さんにお渡しした地図ではそれなりに見えるかと思いますが、中心部を大きくしました。豊平川はここですね。実は、ここに茂八という名前が書いてあります。吉田茂八という札幌に最初に住んでいた人という話になっていますが、最初かどうかはなかなか分からないのですが、向かい側に志村鐵一の「鐵一」という名前が書いてあります。ですから、この辺が今の豊平橋の辺りです。実は、このところに黄色い線が見えますが、これがさっき言った勇払から石狩へ抜ける道路の札幌の部分の道路です。

見えますか。何となく黄色くなっているのですが、皆さんのものでも、よく見ると見えなくはないのですが、今の創成川、当時の新堀を渡るところに橋のようなものが描かれています。11月の図書館の講演会を聞かれた方には、これがあったかもしれないという話をしたのですが、一応、橋らしきものが描かれていて、ずっと黄色い線がこちらへ行っています。これが銭函道とか千歳道、札幌越新道と言われる今の勇払と石狩を結ぶ路線、道路の札幌の中心部を通ったルート、路線です。

この地図は、一応、明治2年10月頃までの絵図と言われている図です。ここに絵図の由来が書いてあるのですが、明治8年になって、高見沢権之丞さんという人が昔のことを思い出して描いた図だと言われています。これを見ると、この絵図そのものが絶対正しいよというわけではないのですが、一応、これを基本にして見ていくと、今の札幌のまちの中心部がこの辺りになります。ここは、多分、今の創成橋の辺りになりますので、見ると、そこの辺りからずっと黄色い線が南へ行っています。ですので、高見沢権之丞の記憶でいくと、もう札幌にまちづくりを始めた明治2年の頃には、こちらへ向かう道路があったという記憶になっているのですね。

このときは、もう東区の札幌村や琴似村がありますので、北のほうを見ると、そちらへ向かう道路がちゃんと描かれているのですが、こちらにも描かれているのですよ。ここにハツタリベツ道と書いてあるのです。八垂別へ行く道路という意味だと思います。八垂別というのは、今の藻岩の南の側ですね。川沿ら辺一带がみんな八垂別となるのだらうと思いますが、そちらへ行く道路が描かれているのです。

考えてみて、開拓を始めたばかりですね。先ほど幕末に開拓しましたよと言ったのも、あれは安政の時代ですから、明治から考えると10年くらい前でしかないのです。ですから、それから見て10年ちょっとぐらいしかたっていない時期に八垂別へ行く、今で言うと、藻岩南、川沿や石山地区へ行く道路があったらしいということですね。

何であったのでしょうか。何か思いつく方はおられますか。

○フロア 石ですかね。

○榎本講師 石の発見は、明治五、六年ということになっているのですよね。

これは、あまり話になったことがないので、ちゃんと研究されている方がいないので、私も推測でしかないのですが、明治6年、7年、8年とか10年前後の頃に、八垂別や月寒や厚別などを開拓使が官林指定するのですよね。何のために官林指定するかというと、木材を切り出してきて、それを村や町の家をつくるための木材生産をするのですよ。ただ、その辺に立っている木は家を建てるための木材にはならないので、松系統というのでしょうか、杉系統というのでしょうか、そういう真っすぐ立っているような木が必要になりましたので、八垂別には、開拓使になってから、そのための官林を開くのです。

ただ、幕末とか、もっと前に、実は、イガラシと言ったかな、商人が江戸時代に石狩に入ってきて、石切山に伐木に来るのですよ。もしかすると、そのときの名残かもしれません。ですから、札幌周辺にも入ったのかもしれないし、一応、記録に残っているのは、夕張の手前ぐらい入っているらしいのですが、そちらになると、私も知識が全然ないのです。

後に開拓使で官林にして木材切り出し場にするということは、もしかすると、そのときからか、ないしは、札幌村を開いた、発寒村を開いたよというときに木材切り出し場にしたのかもしれないですね。だから、そこへ行くルートがあったのかもしれないです。これは、推測というよりは、まだ想像の段階ですけれども、そうでないと、何をしに行くのかなという感じになってしまうのですね。

後で出てきますが、本願寺街道というのは、川のこちら側ではなくて、向こう側を歩いて、ずっと定山溪に行きますので、多分、当時の急流の豊平川では、こちら側からは渡るのが大変だったのだらうと思うのですよ。だから、今の硬石山の辺りとか、この当時の八垂別の辺りへ行く道路だらうと思うのですよ。

その前に、実は、本当に高見沢さんの記憶が正しいかというのもあるのですが、あったとして、そうしたら、幕末の移民が入るための木材供給をするためのルートだったのかもしれないということですね。

私も、これが正しいということまでは言えませんけれども、一応、そういう可能性があるよということですよ。ですから、この地区といいますか、このルート沿いに確実に当たりますから、当然、このルートとの関わりで、発展したり、衰退したりというのはあり得るのかなというのは、何となくですが、思いつくわけです。

この点で考えていきたいということで、例えば、レジュメの3の2行目ぐらいですが、この八垂別の地域というのは、実は、東本願寺が置かれた後に本願寺街道がつくられる場所でもあるのですね。レジュメに書いてあるとおり、山鼻村と八垂別間の道路を本願寺がつくるのですよね。それがどこのルートなのか、今あった地図にあるルートと同じなのか、さらに新しくつくるのか、ないしは、同じルートでもちゃんとした道路にするのか、踏み分け程度だったのが、きちんと木を切り開いていくのかというようなことですね。

東本願寺というのは、本願寺街道というと、有名なのは、川を渡って、豊平橋を渡って、平岸の辺りからずっと南に行って、定山溪を抜けて、中山峠を抜けて、有珠へ抜けていく道路、レジュメでいくと、「札幌西長流間」と書いていますが、これがいわゆる本願寺街道と言われているもので、そちらが有名ですが、この八垂別へ抜けていく道路というものも実は本願寺がつくっているのですよ。ですから、もともと道路があった、もしかすると、東本願寺は、それを見て開拓に必要だということで、それをつくり直しているかもしれません。同じルートか、ないしは、若干違うルートをつくっているのかもしれませんが。

取りあえず、明治2年頃にはもう道路があったかもしれない、東本願寺もつくっているという話をいたしました。

これが先ほどお渡ししてある地図と同じです。3枚目ぐらいに見たものですが、このところを見ると、東本願寺の裏から東本願寺の脇のところ当たるのがさっきのハツタリベツ道ですが、この地図で見ると、この辺りのところの道路ですね。この道路は、その後、3本に分かれていたりしますし、円山のほうから来るルートもあるというふうに描かれています。これが何でつくられたかというのは、さっきの予測です。

ところが、実は、札幌に本府をしっかりと造り始めると、そのときに、今度は先ほど言ったみたいに石材を出すため、最初は、今の円山で石材が発見されて、それから、今の硬石山で石材が発見されて、その向かい側の石切山で軟石のほうも見つかってということになります。

結局、円山で見つかった石材は、質が悪くて使えないということで放棄してしまうのですが、硬石山と石切山の石材は、後も利用されてきました。つい最近という言葉でもいいのかもかもしれませんが、利用されています。

この地図でいくと、こちらが硬石山です。多分、軟石がこの辺りに当たるのだらうと思います。

ですから、このルートは、先ほど明治2年の絵図では木材の可能性の話をしました、もちろん、この辺が八垂別の官林になりますので、ここからの木材切り出しというのは当然出てくるのですが、明治5年、6年ぐらいになると、石材が発見されたことで、ここから石材を運んでいくルートというふうにも位置づけられたということです。

ですから、今、こういう言葉は残っていますかね。産業道路という言葉です。産業のために開発された道路、多分、その役割ですよ。ですから、山鼻というのは、屯田兵が入ると、山鼻屯田で、何か山鼻村といったら屯田兵というイメージになってしましますが、むしろ、幕末から木材、明治に入ると石材というもので、産業道路の位置づけがあって、山鼻地区というのは、その道路沿いだった地域だと位置づけられるということですね。

ですから、多分、屯田兵の周辺、周囲は、そういう開発がなされている可能性があるということですね。調べてみても、そういう事実というものなかなか出てこないのですが、私の予測的には、屯田兵の南側の開発というのは、多分、そちらの系統の開発があるのかなという気がします。

その辺がレジュメの話で、明治5年頃から石材が発見されてと書いてあります。レジュメには、木材の話は書いていないですけども、これに木材が加わっているのだということですね。

そして、これは明治6年の地図ですが、実は、こここのところに石切所道と書いてあるのですよ。同じ観点で見ると、やはりここにあって、東本願寺のすぐ脇のところだということですね。

これでいきますと、実は、明治6年の地図なのに、山鼻屯田が入植しているような絵図になっているのです。多分、地図の使い回しで、恐らく、明治6年の地図を描いておいて、山鼻屯田の入植地をどうするという話をしたときに、多分、その地図の上書き込んだのだらうと思います。

上に書き込んだというのは、よく見るとお分かりのとおり、南北を示す記号の上に碁盤地が書いてあったり、原野に木や草が生えている様子のあるところの上に道路を描いたりしているでしょう。ですから、使い回しをしたのですね。別に、使い回しが悪いとか、いいとかではなくて、使い回しをしているので、かえって、今日の説明にはちょうどいいですよ。

これは、まち中があって、南1条通がずっとあって、これが昔の勇払から石狩へ抜ける道路です。それが、都市が整備されてくる中で、きちんとこういう道路に整備されていったのですが、その脇に、真っすぐ南へ行く道路とか、西屯田、東屯田というのが描かれているのが分かりますよね。屯田兵が入るときに、そういうように整備をしていったということです。

その屯田兵が入植するときの資料にこういうものを見つけたのですよね。ああ、なるほど、やっぱりというふうに、「序下渡島通より左折山鼻村へ此度屯田兵員移殖相成」と書いています。どういうことかという、これはさっきの地図ですが、これは今で言うと南1条通なのですが、この頃は渡島通と言うのです。渡島通をずっと来て左折していった道路、左折して山鼻屯田が入植すると書いてあるのです。

実は、この資料の主眼はそちらではなくて、屯田兵が入植することで「石山新道筋は兵員家作地并開墾地ニ割渡廢道」になる、つまり、石材を切り出すために、木材を切り出してくるためにつくってあった道路が、屯田兵が入植したことで廢道になってしまう、ちょうどその真上に屯田兵が入植するということですね。

「更ニ一条之道路開作無之テハ石山街道住居人民之迷惑眼前ニ付」ですね。ですから、恐らく、伏見の辺りとか、どこかに住民がいたのだらうと思うのですよ。それは、さっきの石材、木材を切り出してくる道路沿いに住んで、まち中との交流ができるようにしていたのを、その真上に屯田兵が、山鼻屯田が入植してしまった、してしまうという話です。

それで、別紙図面のとおりなのですが、道路橋梁入費金より、道路開作なくては困ってしまうからというので、政府から金を出して道路をつくりましょう、それが11丁目通、石山通だということです。ですから、屯田兵が入ることで、山鼻に住んでいる人たちの生



活の邪魔をしてしまう、そういう関係になってしまった、だから、それを解消するために11丁目通をつくるのだよという話です。

ついでに話をしてしまうと、これは、先ほど3番目に見せた絵図です。山鼻の辺りに点々が、実は家があるのですね。この辺一帯に屯田兵が入るのですよ。点々はあるのですよね。

それから、どうもこの地図は凡例が書いていないので、実際のところは分からないのですが、この地図の描き方でいくと、この辺もそうになっていますが、これは開墾したところなのですよね。だから、ちょびちょびだけでも、屯田兵が入る前に開墾されている場所があるのですよ。これの上に屯田兵が入ってしまうのですよね。

住民もいるみたいなのですよ。だから、この辺、いわゆる伏見地区の人たちはちょうど山鼻屯田の入植地から外れるので大丈夫なのでしょうけれども、中心にいる人たちは、多分、追い出されたのです。追い出されたというか、多分、土地を買ってもらったということになるのだらうと思いますが、逆に、山鼻屯田から見ると、うまい具合にここを割り当たったら開いてあった、そんなところにもなってしまうのでしょうか。ですから、例えば、この辺の人たちは明らかに移動させられますので、入植することで、この辺の道路が廃道になるだけではなくて、移住もさせられてしまうということがあったのだらうなと思います。

ちょっと先ほどのものへ戻っていきますと、これは山鼻地区に関わる道路の様子です。これは、開拓使事業報告という資料の中に書いてあるもので、明治5年頃に本願寺脇から道路をつくったということです。

そのほか、明治9年に渡島通より山鼻村を経て硬石山までの新道、これがさっきの資料にあった山鼻の住民に迷惑なのでつくったよというあの渡島通から左へ折れてという道路ですね。これが今の国道の原型に当たるわけですね。

それ以外にも、真駒内へ行くための道路とか、11丁目道路を真っすぐ行って、今は途中で曲がって、ずっと、それこそ八垂別のほうへ行くようになっていますが、もともとは真っすぐな道路です。

実は、渡しがあって、川を渡って、その向こう側にまた真駒内の中心部へ行く真っすぐな道路がありますよね。それがこれです。最終的には穴の沢といいますから、軟石のほうの石切り場まで行くのです。そういう道路をつくっています。

それから、真駒内へ行ってしまうということは、あそこは牧場がありますので、産業道路という言葉でいくと、木材と石材と農牧牛生産品、酪農品みたいなものの運搬路ということにもなったのかもしれませんが。その辺で関係するような道路の一覧表を載せてあります。

これが明治28年頃の山鼻の様子です。

画像に出ているのは南端だけになってしまっていますが、ここは屯田兵がもらっているところですね。藻岩山の山沿いのところですから、これが、多分、伏見になるのだらうと思うので、多分、軍艦岬がこの辺りになるのでしょうか。その南に開墾地があって、屯田兵

以外の開墾地がこんなふうにあるという感じで描かれています。見てほしいのは、明治28年だと、この石山通が真っすぐ来て、右へそれていきますが、真っすぐ道路がこちらに来ていたということです。これがさっきの明治9年に真駒内までつくった道路です。

ここは、渡しです。渡し船が渡します。今は、たしかこの辺とかこちらのほうから、脇から入っていく道路になっているのではなかったかと思います。

ここは、南のほうまで見ていくと、ちゃんと石切山、硬石山のところまで行きます。多分、この後、ここを渡ってこちら側へ行くルートができるのだらうと思います。また、こちら側はこちら側で、もともとの本願寺街道、ないしは、その後、それを改修してある道路が走っているはずですが、そちらのほうは、図面的には省略されています。

山鼻ですが、本来ですと、屯田兵の話を中心にすべきなのかもしれませんが、今日は山鼻地区を走っている道路の話を見せてもらいました。もしかすると、幕末から産業道路としての位置づけがあった可能性があるということを含めて、開拓使時代になると石材を中心に切り出しの道路があったのですよという話で、屯田兵が入植するときも、そこへはなくなってしまふ関係で、ちゃんと作り直さなくてはいけなかった、新たなルートとして作り出さなくてはいけなかったということでした。そして、そのルートは真駒内まで行っていました。

ですから、産業道路的な意味合いでいくと、木材があつて、硬石と軟石の石材があつて、それから、真駒内の牧場からの酪農品がどれだけまち中に入ったのか分かりませんが、肉が入ったのか、酪農品が入ったのかは分かりませんが、そういうルートがつくられていって、山鼻地区というのは、そういう位置づけでもあったということになるかと思っています。

そのせいで、その後、屯田兵は、明治37年、1904年に屯田兵制度は廃止になります。ですから、屯田兵というのはいなくなってしまう。ところが、その明治37年というのは、たしか2月か3月ぐらいから日露戦争が始まっているのですよね。山鼻屯田の人たちも、後備役として動員されているのですよ。ですから、兵役そのものが終わるのは、明治38年に戦争が終わって帰ってきてからということになります。

屯田兵制度がなくなってしまうと、実は、屯田兵というのは、別な言い方で検束移民と言われるのですね。これは、もう早い時期、明治8年か9年に屯田兵ができたときから、松本十郎という札幌を管轄していた判官さん、大判官さん自体が屯田兵のことを指して言った言葉なのだそうです。普通の移民ではなくて、検束移民であるということのようです。

検束というのは、縛られた人間、ですから、兵役で縛られながら、多分、先ほど庚午の移民なんかの出奔の話をしてきましたが、出奔というのは、多分、屯田兵の場合は言わない。何て言うと思いますか。脱走です。脱走というとどうなるかという、捕まって軍法会議ですね。ですから、普通の移民とは違って、縛られてしまっている移民なのです。ですから、その屯田兵制度がなくなってしまうと、自由な身になるのです。

山鼻屯田の数字は分かりませんが、茶志内とか、ほかの地域の中では、屯田兵が終わ

った途端にどんどん離農してしまう、その場所から出ていってしまう人が多いという記録もあります。ですから、山鼻も、もしかすると、明治38年ぐらいから、どんどん出ていってしまった人がいるのかもしれない。

ちょうど、その頃からと言ったらいいのでしょうか、札幌の都市発展というものも急激にどんどん進んでいる最中で、山鼻地区とは違う意味合いも持ってきます。それがこの地図です。

この地図は、馬車鉄道の図面です。

馬車鉄道は、石切山にある軟石や硬石を馬鉄で運んでくる路線だったのですが、まち中の場合は、そちらの目的ではなくて、住民が通勤・通学に使うための交通機関として、馬鉄を整備するということになります。

こちらのルートは、この地図は大正の初めぐらいの馬鉄の路線図ですが、大正7年にはまち中のこの馬鉄は市内電車に変わりますが、しばらくの間、こちらは残るのですよね。ですから、軟石方面は、軟石や木材などの産業道路としてはしばらく残るのですよ。ですから、産業道路的な役割があるのが山鼻村の位置づけというふうに言ってしまうのかなというものの再度の強調になります。

その後、レジュメへ戻っていただいて、明治43年には山鼻村の屯田兵村に関わる部分は、札幌区とあって、当時の札幌市の中心部、都市部に編入されていきます。実は、札幌区というのは人口が増えている最中というお話をしましたが、その前後ぐらいから、住宅地がどんどん周辺に広がっていきます。明治20年代ぐらいまでは、まだ何とかまちの中心部で抑えられていたのですが、どんどん外側へ外側へ広がっていきます。

山鼻はどういう位置づけになるかということ、すぐ南隣ですよね。ですから、札幌区としては、そういう拡大の可能性のある地域を明治43年に札幌区のほうに入れてしまうのです。豊平川を渡った今の菊水の辺りとか、豊平の何条何丁目の辺りとか、北は今は中央区に入っているような札幌市の南側の辺りを、全部、札幌区のほうへ入れて、都市の周辺域にしたのです。

それから、10年もたたないぐらいに、これは大正6年の図ですから、札幌区に入ってから7年、8年ぐらいですかね。まだ山鼻地区で住宅地が北のほうから広がりつつあります。でも、東屯田、西屯田の辺りは住宅地が混み合ってくると。東屯田、西屯田が、恐らく兵屋だったところが住宅地になって、もしかすると商業地域に変わりつつある時期なのかもしれません。今だと、東屯田、西屯田の北のほうだと商業地域になっていますよね。ですから、住宅地化がだんだん山鼻へ伝わってきています。

これは、昭和12年の地図です。ですから、まだ20年までたたないぐらいの時期に住宅地が南のほうまで来てしまいます。

ここが今いるところです。師範学校のところですので、今この辺にいるはずですよ。十数年で、この辺まで住宅地化がだっと進んできたということです。ですから、札幌区、都市部の札幌と一緒にいることで、札幌の発展の中にどんどんのみ込まれてきたのが山

鼻地区だということですね。

その山鼻地区ですが、レジュメには石山通を中心にと書いていますが、この辺の窓から外側を見ても分かりますが、住宅地化もさらに質が変わってきて、高層住宅化してきているのですね。新琴似や屯田も大きなマンションが建ち始めてはいますが、まだ、ここほどではないです。ですから、札幌という都市の中で、効率のいい住宅地に変質しつつあるのが今の山鼻地区ですね。そんなふうに変化してきました。

ですから、歴史をずっと見てくると、ちょっと強引かもしれませんが、産業道路的な位置づけがあった山鼻地区というものが、都市・札幌に組み込まれていくことで、住宅地化していったという様子です。

最後はちょっと駆け足になりましたが、ありがとうございました。（拍手）

## 5. 質疑応答

○司会 榎本様、どうもありがとうございます。

せっかくの機会ですので、何かご質問がございましたらお受けしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、最後に、先生にまた感謝の拍手をお願いいたします。（拍手）

## 6. 閉 会

○司会 本日の研修会はこれで終了といたします。

ご参加を本当にありがとうございました。

お帰り際には、お忘れ物のないようお願いいたします。

なお、図書館の2階では、今回の講座に合わせて、テーマに関連した書籍を展示していますので、ぜひお帰りの際に見ていただければ幸いです。

皆様、どうぞお気をつけてお帰りくださいませ。（拍手）

以 上